

近世大坂の氏神神社に関する基礎的考察

本多 健一(立命館大学アトリサーチセンター 客員協力研究員)

E-mail hondak@fc.ritsumei.ac.jp

I はじめに

近世においては城下町をはじめとする多くの新たな都市が成立していったが、その中で神社・寺院などの宗教施設が、従来からいかなる変化を遂げ、時に生まれたり再編されたり消えていったりしながら、最終的に都市の内部に定着していくのかという問題は、文化史・宗教史のみならず都市史研究においても重要なテーマといえる。

この分野において最も研究が進んでいるのは、城下町における寺町の形成であろう。近世寺町については、市街地外縁部に多数の寺院を集团的に配置することを通して、都市の防衛ラインを形作ったという政策的意図が指摘されており、既に数多くの研究がなされている¹⁾。

対して神社については、例えば新たな近世都市が建設されていく中で、他所からそこに移り住んできた住民たち(氏子)の地縁的な紐帯を強め、精神的拠り所となる氏神神社²⁾がいかにして成立していったのかという問題があげられる。具体的には、従来から鎮座していた神社が選ばれて取り込まれたのか、それとも新しい神社が創祀ないし勧請されたのか、あるいはその過程で領主権力の関与があったのかどうかなどを解明する必要があると思われるが、これらの課題については研究が進んでいるとはいえない。

従来³⁾の論考では、筑前国福岡を対象にした西田博が、氏子区域の分析から黒田氏による城下町建設に際して周辺村落および氏神神社の移転・再編が行われ、一部の神社を福岡城の鎮守神ないし市中の氏神として城下に取り込む一方、残りの神社を都市外へ排除することによって「精神面における兵農・商農分離を図った」とする結論を導き出した³⁾。また、筆者も飛騨国高山を対象として、やはり氏子区域の分析な

要旨

本稿では近世大坂の氏神神社を対象として基礎的な考察を行い、その結果、主として16世紀から17世紀初頭にかけての実態(歴史・性格・鎮座地など)が明らかになった。なかでも近世大坂市中の氏神神社は、すべて中世に存在していた中小都市または村落の氏神を引き継いだことが明らかになった点などは、特筆すべき成果といえよう。

abstract

This article provides a fundamental study for *Ujigami-Jinja* (shrines) in early modern Osaka. As a result, those actual situation (e.g. history, character, location) from the 16th century to the early 17th century has been clarified. As a noteworthy achievement, for example, all *Ujigami-Jinja* (shrines) in big city of Osaka succeeded those in small towns and villages in Medieval ages, etc.

どから、初期城下町の氏神社選定や氏子区域の区分けにおける金森氏の積極的関与などの新知見を見出した⁴⁾。ただ、このような近世に成立した都市と氏神社との関係についてはまだまだ研究が乏しく、現時点では事例の蓄積を進めていくべき段階にあるといえよう。

以上を踏まえ、本稿では近世大坂における氏神社を対象として、城下町成立以前のそれらの実態解明を目的とする。後で詳しく述べるが、大坂市中の町人を氏子とする氏神社は九社あるものの、それらが城下町建設以前にはいかなる状態であったのか、その後いかにして都市の民衆が氏子となり、氏神社の地位を確立していったのかといった経緯は、一部の神社を除いてほとんど明らかになっていない⁵⁾。よって本稿では、それらの神社が大坂市中の氏神となる直前、もっぱら戦国・安土桃山期(一六世紀～一七世紀初頭)の各社の実態について基礎的考察を行い、その歴史や神社の性格、鎮座地の状態などを明らかにする。これらを通じて文化史や宗教史にとどまらず、都市史研究にも一定の貢献をもたらすような成果をめざしたい。

なお、大坂の神社をめぐる史料が乏しい現実を踏まえ、本稿では考古学・歴史地理学・民俗学などの諸成果も積極的に活用して論考を進めていきたい。

Ⅱ 対象とする神社と中世までの地域概観

1. 大坂市中の氏神社

近世大坂市中(大坂三郷)の氏神社は、第1表に示したように九社ある⁶⁾。このうち、おおまかにその歴史が明らかになっているのは生國魂神社(生玉社)・坐摩神社(座摩社)・大阪天満宮(天満天神)の三社である。すなわち生國魂と坐摩はいずれも式内大社であり、古代の宮中祭祀や難波宮との関連なども指摘される重要な神社であった。中世の記録は少なくなるものの、それぞれ大坂寺内と渡辺という戦国期の都市の氏神として存続してきたと考えられている⁷⁾。対して大阪天満宮は一一世紀の頃に創建され、中世には鎮座地の中島(天満)周辺に小規模な門前町を形成して、参詣者も多かったと推定される⁸⁾。これらが近世大坂市中の氏神社となつて、現在に至っているのである。

一方、これらを除く六社では、創建は古代にさかのぼるとする由緒を持った神社が多い⁹⁾。現在、仁徳天皇を主祭神とする難波神社(博労稲荷)や高津宮では、いずれ

も創建に際して同天皇とのゆかりがあったとしており、御霊神社(津村御霊社)では古代八十島祭¹⁰⁾の祭場とされた円神祠が同社の起源としている¹¹⁾。他に玉造稲荷神社・御津宮(三津寺八幡)・難波八阪神社(牛頭天王社)でも、遅くとも平安期には神社が創建されていたとしている。

しかしこれらの由緒は、古代の史料などによる裏付けをとることがまったくできない。さらに中世の史料においても、後述する御津宮を除いて各社の諸記録は一切現れないのである。以上のような状況を鑑みると、各社の主張する由緒は尊重されるべきではあるが、学術的にそれらを確定させることはほとんど不可能に近いといえよう。

よって本稿では、生國魂・坐摩・大阪天満宮を除く大坂の氏神社六社を考察の対象とするが、古代に濫觴を有するという由緒の考察は控え、焦点を以下の内容に絞ることとする。すなわち各社の様相が明確になる江戸期の直前、主に一六世紀から一七世紀初頭の戦国・安土桃山期(織豊期)において、各社はいかなる実態であったのかという問題に限定して、論考を進めていきたい。

管見の限り、このような課題に言及した論考は、矢内昭が「後には船場町中となつた街区を氏地に持った亀井町(中央区)の御霊神社、南渡辺町(中央区)の坐摩神社、上難波町(中央区)の仁徳天皇神社、南木綿町(中央区)の三津八幡宮なども、元来は各村の産土神祭祀とかかわつて旧村地に鎮座した」¹²⁾と述べているのが唯一と思われ、これらの神社は、いずれも中世村落の産土神(氏神)であったとしている。この結論は注目すべきものであるが、近世に移転してきた坐摩(後述)を、中世からその地にあった氏神とみなすという事実誤認があり、高津など言及されていない神社もあるため、改めて精査をしながら諸神社の歴史を明らかにしていきたい。

2. 鎮座地の分布と中世までの地域概観

大坂の氏神社の歴史を考えるにあつて、第一にやつておきたい作業は、各社の鎮座地およびそれらの地理的分布の確認である(第1図)。氏神社九社のうち、まず生國魂・高津・玉造稲荷の三社は上町台地上に、大阪天満宮は大川を渡った北岸の天満砂堆(砂州)上に鎮座している。このうち生國魂は、かつては大坂寺内の氏神として現在の大阪城の位置にあつたが、豊臣期大坂城築城にともなつて移転している¹³⁾。いづれにしても縄文時代から人が住み、古墳時代の五世紀には法円坂倉庫群、難波堀江といった国家的な大規模土木工事が施行されるなど、大阪発祥の地といえる上町

台地上である。

対して残りの五社は、船場（東横堀川・旧長堀川・旧西横堀川・土佐堀川に囲まれた地域）および島之内（東横堀川・道頓堀川・旧西横堀川・旧長堀川に囲まれた地域）の西端部、心齋橋筋と旧西横堀川にはさまれた南北に細長い領域およびそれらの南側に鎮座している。さらにこの領域を南へ伸ばすと、近世木津村の氏神、敷津松之宮（牛頭天皇社、浪速区敷津西一丁目）もある¹⁴⁾。以上は、いずれも古代から近世にかけての摂津国西成郡に属すが、南北方向へほぼ一直線に並ぶという特徴が見出せる。

ただし、このうち坐摩神社は、もともと中世渡辺の中心地に近い、上町台地西北端部の現中央区石町二丁目に鎮座し（現在の行宮（御旅所））、やはり豊臣期大坂城築城にあわせて移転したとみられるため¹⁵⁾、ひとまず除外しておく。それでもこれら多くの神社群の鎮座地が地理的に特徴ある分布を示していることは、各社の考察に際して看過しえない点といえよう。

この問題については、古代から中世にかけての船場・島之内における地形および集落の形成過程と関連させて考えていく必要がある。最近の古地形復原研究によれば、古代の同地域は、難波乃海（大阪湾）に面し、上町台地に並行して南北に細長い難波砂堆が複数形成され、砂堆の微高地と潟の浅瀬ないし低湿地とが交互に立ち現れるような地形であつたらしい¹⁶⁾。ちなみに、そのような景観を上町台地から見下ろしてうたつたと思われるのが、仁徳天皇作といわれる次の歌である。

おしる難波の崎の並び浜並むとこそその子は有りけめ¹⁷⁾

このようなかつての地形を鑑みると、御霊神社から難波八阪神社まで、大坂の氏神社四社（木津村の敷津松之宮を加えれば五社）が南北一列に並ぶ地理的特徴は、難波砂堆群のうち心齋橋筋と旧西横堀川にはさまれた範囲に、水はけが良いなど最も安定的な砂堆が生成されていたため、その上に鎮座地が選ばれた可能性が高いと考えられるのである。それゆえ、これらの神社には、歴史や性格などの共通性が見出されるのではないかとという推定も可能であろう。なお、豊臣期にはこの領域に寺町街区が設けられていた。

ではこれらの神社はいづれ創祀されたのであろうか。そのためには、難波砂堆群上にどのような人が定住し、耕作をしたり漁労を営んだりしながら集落が形成

されていたかを明らかにする必要があるが、平安前期以前ではその過程を解明することは難しい。例えば、『続日本紀』天平勝宝五年（七五三）九月五日条には「摂津国御津村」が高潮の被害を受けたとあり、仮にこれが後の三津寺村（現中央区西心齋橋二丁目付近）を指していたとすれば、当時の砂堆上に大きな集落が形成されていたことになろう。しかし承平年間（九三二〜九三八）頃に成立した『倭名類聚抄』は、西成郡の地名として一二の郷名をあげているが、これらが難波砂堆上にあつたかどうかは現時点では不明である¹⁸⁾。また、この地域には条里地割も確認されていない¹⁹⁾。

従つて、確実に難波砂堆上の集落の状況や荘園の成立過程などが明らかになつてくるのは、それ以降の時代となろう。時代は下るが、中世においてこの地域にいかなる村落があつたのかがわかる史料が、元龜元年（一五七〇）、織田信長軍が野田・福島城に拠る三好三人衆と対峙した様子を伝える『細川両家記』である。

史料①「八月廿四日、信長人数三万余騎にて京上也、則御所様被参由候也、同廿五日に河内牧方（枚方）と云処へ下、同廿六日に天王寺へ陣取也、其外諸勢は渡辺・津村・上難波・下難波・木津・今宮・部戸（郡戸）陣取由候也」²⁰⁾（括弧内は筆者による、以下同じ）

この記述によれば、織田軍は港町であつた渡辺を起点に、津村から郡戸村（後の高津村）までの各村落に陣取つた。地名などからこれらの位置を比定すると、北の津村から南の今宮村までが難波砂堆上に分布していたと考えられる。ただ、上難波村と下難波村の間に位置していたと思われる三津寺村が記されていないが、これは当時の三津寺村が大坂本願寺方の拠点であり、織田軍が展開できなかったためであろう²¹⁾。

これらの村々について、文献史料上の確実な初見をまとめたものが第2表であり、本表から、大坂周辺の中世村落は遅くとも一二世紀平安後期から鎌倉期の頃には成立していたことがわかる。なお、最後の郡戸村は、後述するように西成郡と東成郡とにまたがり、集落の屋敷地は上町台地上にあつたが、耕地は同砂堆にかかつていたと推定される。

ここで改めて鎮座地の分布に目を向ければ、南北に並ぶ近世の氏神社と、同じく南北に並んだ中世村落との間に密接な関連があることが想定できるのではないだろうか。すなわち近世大坂市中の氏神社は、もともと平安期から鎌倉期にかけて成

立した村落の氏神であつて、それらが城下町建設にあわせてそのまま引き継がれたのではないかという可能性が指摘できよう。

それでは以上の考察を踏まえて、次章より大坂市中の氏神社六社について、近世以前のあり方を個別に検討していきたい。

Ⅲ 各氏神社の考察

1. 三津寺村の三津寺八幡

対象六社のうち、現時点で神社の創建や性格、中世村落との関係などの歴史が明確になつてゐるのは、一七世紀初頭まで存在した旧三津寺村の氏神、三津寺八幡(御津宮)が唯一の事例である。

瀧川政次郎の研究²²⁾によれば、『石清水文書』中の『田中家文書』承久二年(一二二〇)―二月付「檢校祐清讓狀」に、「壇殿女房」へ譲渡する土地として「摂津国三津寺皇三段 在八幡河合」とあり²³⁾、一方で延久元年(一〇六九)に石清水八幡宮が提出していた所領荘園に関する記録の中に「三津寺」がないことから、「三津八幡宮は、石清水八幡が源氏の氏神として勢力を伸長した鎌倉時代の初期に、難波の三津寺の地に八幡宮寺の庄園ができ、その庄領内に創建された」と推定した。この見解は説得力があり、首肯されよう。

その後三津寺庄が三津寺村となり、さらに元和六年(一六二〇)頃に大坂市中へ取り込まれて三津寺町などとなるが、現在の御津宮には同村関連の近世文書が多数残されている²⁴⁾。よつてこれらに依拠して、当地が中世村落から近世都市へ転換していくプロセスの研究が多くなされてきた²⁵⁾。

それらの成果によれば、三津寺村の範囲はおおむね島之内の西半分弱を占め、村の南側には三津寺八幡を中心とする屋敷地がまとまつてあり、その周囲が耕地であつた(第2図)。伊藤毅は、このような村落の景観を「畿内では一般的な「垣内村落」の形態をとつていた」としている²⁶⁾。その後都市への転換にあたり、景観的には、かつての屋敷地配置など村落的区画は失われ、整然とした都市的区画に改編された一方、社会的には、以前から住んでいた農民の多くが、町人身分となつてそのまま三津寺町など同地に住み続けていることなどから、村から町への連続性が多くみられるとされている。

寛文七年(一六六七)の『御津八幡宮縁起』によれば、かつての三津寺八幡は「三津寺村惣百姓持之社」であり、市中へ組み込まれた後の寛永五年(一六二八)にも、三津寺町がその「宮屋敷」を買収取つて、同町町人たちが維持・管理する神社として存続した²⁷⁾。また、近代における同社氏子区域の相当部分が、中世三津寺村の範囲と重なっていることも、神社の性格が、地域の氏神として連続してきたことの傍証となろう。

以上のように三津寺八幡は、難波砂堆上に設けられた荘園の鎮守として勧請され、中世村落の氏神となり、そのまま近世以降の都市の氏神に取り込まれて今に至つているといえる。

2. 西高津村の高津宮

次いで検討するのは高津宮である。江戸期の同社において特筆すべきことは、多くの大坂三郷の町々を氏子としながらも、その維持・管理は西成郡西高津村の村民または元村民たちの宮座によつてなされていた点であろう²⁸⁾。よつて同社のもとの性格は、明治三〇年(一八九七)まで存続していた、近世西高津村の氏神であつたことは明らかである。さらにそれ以前はどうであつたかという点、同村は東成郡東高津村とともに中世の郡戸村(郡戸庄)²⁹⁾から分かれて成立したとみられるため(後述)、元来の高津宮は郡戸村の氏神であつたのではないかと推定できよう。しかし、問題はそう単純ではなく、以下に述べるように、同社および同村をめぐるはきわめて複雑な事情がある。よつて推測を交えることにはなるが、それらをきちんと整理した上で結論を導き出す必要があると思われるのである。

第一に高津宮には、かつて大坂城近辺に鎮座していたが、同城築城にともなつて遷座してきたという伝承がある。例えば『和漢三才図会』正徳二年(一七一二)の説明は、以下のようなものであつた。

史料②「高津社 在生玉社之北(中略)按当社神伝紛失、相伝往昔隣于生玉社「今之農人橋広小路之辺」、天正年中秀吉公築城時、遷社於坤方「生玉及森社亦同時被退」、今謂高津町「人家裏有古跡」、尋復遷今之处(以下省略)」³⁰⁾〔「内は割注、以下同じ」〕

仮に同社が「農人橋広小路」(現中央区法田坂一丁目)から移転してきたとすれば、

それ以前から郡戸村の氏神であったのかどうかという問題が生じよう。

第二に、高津宮とは別に、かつての東西高津村の地には「元高津」を称する東高津宮（現天王寺区東高津町）という神社が現存しており、他にもかつて北高津宮（現天王寺区餌差町）という神社があった³¹⁾。高津も含めたこれら三社には密接な関連があったと思われる、それを明確にしておかねばならないだろう。

これらを受けて、第三に郡戸村と東西高津村との関係、例えばいついかなる経緯で東西に分裂したのか、もともとの郡戸村はどのような範囲であったのかという点も明らかにしておく必要がある。特に西高津村は、大坂三郷へ隣接していたために江戸期の都市化が著しく、それ以前の状態の復原には精査を要するのである。

以上のような課題を検討するために、次のような作業を行う。まず関連する事項の年表を第3表としてまとめ、次に明治一九年（一八八六）作製の『大阪実測図』に基づいて、当時の東西高津村の範囲を第2図へ描画する³²⁾。さらに『西成郡史』および『大阪府全志』より、江戸期において西高津村から大坂三郷へ編入された記録のある領域を描き加え³³⁾、最後に『大阪府全志』の記述によって、近代における高津宮・東高津宮・御津宮の氏子区域の範囲を描画した³⁴⁾。

これらの図表においてまず確認したいのは、明治期における東西高津村の位置関係である。東高津村は上町台地の東側、すなわち東成郡にあり、西高津村は上町台地の西側、すなわち西成郡にあつた³⁵⁾。一五世紀の『天王寺金堂舍利講記録』には「西成郡郡戸庄」と「東郡戸」という地名があるので³⁶⁾、中世の郡戸村（郡戸庄）も東成郡と西成郡とにまたがっていたと考えられ、それが東西の高津村として分かれていったことは間違いない。

では東西に分裂した時期はいつかという問題になるが、東西高津村は隣接していたのではなく、南北の細長い領域によって隔てられていた点に着目したい。この領域とは、天正一一年（一五八三）、住吉郡平野郷（現平野区）の住民を移住させ、豊臣期大坂城城下町として建造された北平野町（現中央区上汐一丁目）天王寺区上汐四丁目などである³⁷⁾。そしてこの時期を境に東西が別々の村として表記されるようになるため、北平野町の建設と住民の集団移住が契機となつて、郡戸村が分断されたという推測が可能であろう。

この推測に対して史料的な裏付けは見出せていないが、傍証として氏神社の問題を指摘しておきたい。先に述べた通り、高津宮は西高津村の氏神であったが、明治四

年（一八七二）の『八王子神社所蔵文書』撰河氏神兼勤村々神名帳によれば、東高津宮は「東成郡東高津村」、北高津宮は「東成郡餌差町」の氏神であり、いずれも仁徳天皇を主祭神としていた³⁸⁾。これら三社は、鎮座地・祭神・社名の共通性からも、もと中世郡戸村の氏神として同一の神社であったが、北平野町建設によつて東西高津村が分断され、隔てられたために、各村へ氏神を分祀する必要が生じ、結果的に別々の神社が創建されたと考えられるのではないだろうか。さらに現在の北平野町では、いずれの高津宮でもなく、生國魂神社を氏神としていることも³⁹⁾、同町の建設が郡戸村分断の契機であったことを示唆しているよう。

それではいずれの神社が中世郡戸村の氏神だったのであろうか。この点について軽々しく断定はできないものの、現時点での筆者による仮説は以下のようなものである。郡戸村が三津寺村のように「垣内村落」（集村の一種）の形態をとっていたとすれば、氏神は屋敷地の近隣にあつたと考えられる。郡戸村の中心となる屋敷地がどこにあったのかも判然としないが、ヒントとなるのは大永四年（一五二四）、三条西実隆が四天王寺から「コウツ」（郡戸）を経て渡辺に至つたという旅の記録である⁴⁰⁾。大澤研一の研究によれば、中世上町台地周辺の最も主要な南北道は台地西側の「浜路」とよばれた現松屋町筋であり、実隆もこのルートを通つたとみられる⁴¹⁾。だとすれば四天王寺と渡辺の中間にあつた「コウツ」とは、現高津宮の西側付近となり、交通が至便であつた当地が集落の中心であつたと想定できよう。対して、東高津宮や北高津宮の鎮座地近辺を通る中世南北路は見出せず、従つて中世郡戸村の氏神は高津宮であり、東高津宮や北高津宮は、近世になつてそこから分祀されて成立した可能性が高いと結論づけられよう。

ちなみに、近世になつて高津宮が大坂城近辺から移転してきたという説であるが、中世の『天文日記』や『私心記』といった史料には関連する記録が見出せないため、本説の可否は不明と言わざるをえない。ただ中世郡戸村に氏神がなかったとは考えづらく、高津宮が四方から屹立した小丘上に鎮座しているという地形的特徴も考えあわせれば、同社は中世以前から同地に鎮座していたと、筆者には思われる。仮に移転説が史実を含んでいたとしても、それは例えば元からあつた高津宮に対して、別の神社の祭神を合祀したといった意味ではなかつたろうか。

最後に中世郡戸村の範囲を考察してみたい。かつての郡戸村が東成郡と西成郡とにまたがり、その中以後の東西高津村や北平野町が含まれていたことは明らかになつ

たが、全体としての程度の広がりを持っていたのであろうか。この手がかりとなるのが、元和三年（一六一七）頃の石高状況を示すとみられる『天正十九年摂津一國高御改帳』である⁴²⁾。同史料によれば、当時の東郡戸村は約二一石、西郡戸村は約三八石、三津寺村は約一六九石の石高であった。石高がそのまま面積と比例する訳ではないが、一応の目安となりうるので、既に建設されていた北平野町の存在も考え合わせると、中世の郡戸村は、三津寺村の四倍ないしそれ以上の広さを有していたと推定できよう。

以上をもとに第2図上で復原を試みれば、西高津村に関して大坂三郷へ編入された記録のある領域も含めて見ると、北西の欠落部分、すなわち島之内東部の扱いが問題となろう。既存研究によれば、島之内東部は元和年間中には市街地となったが、それ以前については、宝暦七年（一七五七）、森幸安が作製した歴史地図、『大坂分町地図』⁴³⁾における「此邊泥沼」という記述がそのまま追認され、いかなる村に属していたのか、どのような土地利用がなされていたのかといった点は明らかにされてこなかった⁴⁴⁾。

しかし、島之内東部が元和以前の西高津村、ひいては中世の郡戸村に属していたことを示唆する傍証はいくつか存在する。まず同地域が高津宮の氏子区域となっていた点である。一七世紀なかば頃の西高津村の範囲の多くが高津宮の氏子であった（第2図および第3表）ことを鑑みると、元和以前の島之内東部も同村の一部であった可能性は高い⁴⁵⁾。次に宝暦三年（一七五三）の『初発言上候帳面写』によれば、島之内東部の町である南竹屋町の旧名が「郡戸町」、高津町の旧名が「西高津町」といったように（ともに現中央区島之内二丁目）、西高津村ないし郡戸村との関連を示しており⁴⁶⁾、しかも史料②で紹介したように、高津町には一時高津宮が遷座していたという伝承もあった。

さらに道頓堀川を隔てて南側の高津新地（現中央区日本橋一丁目など）に着目すると、延享二年（一七四五）、大坂三郷へ編入される以前の同地は、西高津村に属する田畑となっていたが⁴⁷⁾、中世の高津新地と島之内東部には、地形などの土地条件に大きな差異はなく、連続して利用されていたとみなせられる⁴⁸⁾。以上によつて、島之内東部の多くは郡戸村に含まれ、耕地として利用されていたと推定されるのではないだろうか。これまでの考察をまとめて、筆者が中世郡戸村と推定した範囲を第2図に破線で描画しておくので、諸賢のご批判を仰ぐ次第である⁴⁹⁾。

3. 津村の津村御霊社

戦国・安土桃山期の津村御霊社（御霊神社）については、具体的な状況がわかる記録はきわめて乏しい。文献史料では寛永一五年（一六三八）の『毛吹草』に祭礼が「九月」津村 廿七日、摂津」と記され⁵⁰⁾、絵画（絵図）史料では西宮市立郷土資料館蔵『慶長十年摂津国絵図』に「橋御霊」と描画されている⁵¹⁾のが同社の初見であろう。また延宝三年（一六七五）の『蘆分船』には「新御霊 此社の濫觴詳ならず」とあるように⁵²⁾、その由緒も判然としていなかった。

一方その鎮座地に隣接する一帯（近世の津村五町）の町割・街区割には、近代まで不整形な屈折や屈曲が残され、他の大坂市中の整然としたそれらとは異なっていた（第3図）⁵³⁾。この理由は、中世村落の屋敷地区画がそのまま近世都市へ取り込まれたためと指摘されており⁵⁴⁾、具体的には、皇室領荘園の摂津大江御厨に包摂されていた津村郷が津村五町へ継承されたとみられる⁵⁵⁾。よつて津村郷も三津寺村と同じく「垣内村落」の形態をとっており、その屋敷地に隣接していた津村御霊社がその氏神であったと結論づけて問題ないであろう。

4. 下難波村の牛頭天王社と上難波村の博労稲荷

現在は難波神社・難波八阪神社と称する博労稲荷と牛頭天王社については、『蘆分船』に「そのかゝ上難波にハ平野大明神（仁徳天皇）を尊崇して上の宮（博労稲荷）と号し、下難波にハ祇園牛頭天皇を勧請して下の宮（牛頭天王社）と称す」とあるように⁵⁶⁾、江戸期の両社は上下一対の存在と考えられていたようである。

また「上難波」「下難波」という地名は史料①と対応し、『天正十九年摂津一國高御改帳』でもそれぞれ独立して記されているため、おそらく一二世紀後半には成立し、室町期の頃まで存続していた難波荘⁵⁷⁾が何らかの理由で分裂し、戦国期には上下別々の村になっていたのであろう。『西成郡史』によれば、上難波村は南船場に位置していたが、大坂の都市化にもなつて消滅したという。一方下難波村は、もともと現在（旧西船場）（旧西横堀川・旧長堀川・木津川・土佐堀川に囲まれた地域）南部や堀江（旧西横堀川・道頓堀川・木津川・旧長堀川に囲まれた地域）、さらにその南側などにかけて広がっていたが、大坂市街地の拡張にあわせて道頓堀川南側の地へ引き移り、元禄一三年（一七〇〇）には難波村へ改称して、明治二二年まで存続した⁵⁸⁾。

このうち牛頭天王社は、延宝八年（一六八〇）の『難波鑑』では「此天皇は難波村のうち神也」⁵⁹⁾とあるように、江戸期から明治に至るまで難波村の氏神であった。よつて当社はもともと中世下難波村の氏神であり、かつての村域のうち道頓堀川付近以北が大坂市中となったがゆえに、近世の村落と都市双方の氏神として引き継がれたといえよう。

対して博労稲荷は、江戸期より以前の状況を推測しうる証左に乏しく、もっぱら後世の史料に依拠して考察せざるをえない⁶⁰⁾。例えば南船場に鎮座する当社と中世まで同地にあったとされる上難波村とを結びつける記録は、管見の限り、安永七年（一七七八）の『名葦探杖』に「比羅野神祠（博労稲荷）（中略）此地元上難波村なり。今の稲荷といふも則氏神なるべし。浪花栄るにしたがひて今商家の中となれり。則町名に残りて上難波町といふ」⁶¹⁾とあるのみであった。

ただ近世の上難波町の町割には（津村五町ほど明瞭ではないが）微妙な不整形があり（第3図）⁶²⁾、これを上難波村屋敷地の痕跡とみる説が有力である⁶³⁾。以上のように他の氏神神社と比べると根拠が弱い、現時点ではこれ以上の考察ができないため、ひとまず中世の博労稲荷も上難波村の氏神であった可能性が高いと結論づけておきたい。

なお一八世紀以降になって、当社が上町台地付近から遷座してきたという説が『和漢三才図会』などに現れるが⁶⁴⁾、本説は一七世紀の地誌などには記されておらず、信憑性は低いといえよう。

5. 玉造村の玉造稲荷

最後に残った氏神神社が玉造稲荷である。現在、同社が鎮座する一帯の玉造という地名は古代からあったが、『華頂要略』門主伝によれば、戦国期の明応元年（一四九二）には「玉造御庄」とよばれる荘園になっていたようである⁶⁵⁾。その後豊臣期大坂城築造にともなうて大部分が惣構内に取り込まれ、町場化して大坂三郷に属することになった（玉造三六町）⁶⁶⁾。ただし、その南側には玉造村という小規模な出作地が残され⁶⁷⁾、明治まで存続している。

一方この玉造を氏子とする玉造稲荷について、『玉造稲荷栗岡家文書』摂州東成郡大坂玉造栗岡里豊津稲荷社草創之由緒年曆并祠官称宜之座位記録「寛文六年（一六六六）および「稲荷明神旧記」元禄一六年（一七〇三）によれば、同社は垂仁天

皇一八八年に創祀されたが、天正四年（一五七六）の石山合戦で灰燼に帰し、慶長八年（一六〇三）、豊臣秀頼によつて再建されたものの、大坂の陣で再び焼失した⁶⁸⁾。また、天正から慶長にかけて戦乱の影響で鎮座地を遷してはいるものの、玉造一帯を離れることはなかったとみられる。また寛文六年当時の「当社神主称宜」の中には「称宜町」（玉造称宜町、現中央区玉造二丁目）に住む者がいたが、その町名は天正以前から神社に仕えていた彼らの居住地に由来するという⁶⁹⁾。

近世以前の玉造稲荷の歴史をうかがわせる記録は以上であるが、同社が古くから玉造の地と密接に結びついていたことは確かなようである。であれば、同社も中世村落の氏神であった可能性が高いと考えられよう。

IV おわりに

本稿では、近世大坂の氏神神社九社を対象として、主に一六世紀から一七世紀初頭における歴史や性格、鎮座地などについて考察を行った結果、おおむね以下のような実態が明らかになった。

第一に、九社すべてが中世に存在していた中小都市あるいは村落の氏神をそのまま引き継いで、近世城下町の氏神神社として崇敬されるに至ったとみられること。第二に、豊臣期大坂城築城にともなうて遷座した生國魂（生玉）と坐摩（座摩）を除いて、城下町建設後も元来の鎮座地がほぼ維持されたと考えられること。第三に、中世村落の氏神であった六社は、それらの村落が荘園として成立した平安期から鎌倉期にかけて創祀された可能性が指摘しうること。第四に、御霊（津村御霊）・難波（博労稲荷）・御津（三津寺八幡）・難波八坂（牛頭天王）の四社（木津村の敷津松之宮（牛頭天皇）を加えれば五社）は、南北一直線に並ぶという地理的特徴があり、これは古代の難波砂堆群のうち、最も安定した砂堆上への中世村落形成にともなうて創建されたと推定されることなどである。また、中世郡戸村の様相も明らかにした。

これらの結果を受け、氏神神社からみた近世大坂という都市の特徴に関して若干考察し、あわせて今後の課題を指摘したい。まず一六世紀末から一七世紀前半にかけての城下町建設に際し、生國魂と坐摩の移転を除いて、領主権力が氏神神社の選定や再編などに関与した記録が見出せない点である。これは冒頭で紹介した福岡や

高山の事例とは大きく異なる。ちなみに豊臣秀吉による都市改造が行われた京都でも、それ以前からの氏神神社の扱いは、急速な市街地化に対応して下御霊神社(現京都市中京区下御霊前町)が移転した他は、市中の御旅所が整理・統合されたにとどまり、その他の神社鎮座地や氏子区域などが大きく改変されることはなかった⁷⁰⁾。このように近世都市の成立にあたり、都市によって氏神神社への領主権力関与の濃淡が見られることについては、今後比較考察などを通して追究していくべき課題といえよう⁷¹⁾。

次に大坂が大都市へ発展するに際して周辺地域から多くの移住者があつたことが知られているが、彼らが集団で移住してきた場合であっても、出身地の氏神を移住地へ勧請した痕跡が見出せない点にも注目すべきであろう。具体的に本稿で論じた北平野町では平野郷から、玉造では京都伏見から多くの住民が集団移住してきたが⁷²⁾、彼らがそれぞれの氏神であつた杭全神社(現平野区平野宮町)や御香宮神社(現京都市伏見区御香宮前町)の祭神を移住地へ勧請したような形跡がないのである。近世都市への集団移住の実態が明らかになっている事例が少ないため、大坂のケースが普遍的なのか特殊なのかといった判断は今後の課題となるが、第三章2節で指摘したように、北平野町の氏神(生國魂)が周囲の町々の氏神(旧郡戸村の高津宮・東高津宮)と異なる理由の解明などが、その一助となるかもしれない。

最後に中世都市・村落の氏神神社から近世城下町のそれへと変化していく経緯やメカニズムの詳細を、例えば神社の維持・管理や祭礼の担い手などから説明していく必要性も指摘しておきたい。本稿では、三津寺八幡や高津宮において神社の維持・管理をかつての村落の村民や元村民が中心になつて担つていたことを論じたが、一方で氏子の大多数を占めたはずの新しい都市の民衆(氏子町人)がいかなる役割を担ったかにについては不明な部分が多い。祭礼についても、一七世紀後半以降では地車など主たる出し物が氏子町人によつて奉納されていた実態は明らかになっているが⁷³⁾、それ以前の担い手のあり方がどうであつたかという点は判然としておらず、ともにあわせて今後の重要な課題とすべきであろう。

以上のように残された課題は数多いが、これまで研究が皆無に近かつた大坂の氏神神社に関する基礎的考察という本稿の目的は、ひとまず達せられたといつてよいであろう。冒頭で述べたように、都市と神社との関係については、現時点では事例の蓄積を進めていくべき段階であり、本稿を契機に、大坂に限らず他の近世都市においても関連する研究が進展していけば幸いである。

〔注〕

1) 城下町内部の寺町研究は枚挙に暇がないが、本稿の対象である大坂では、①内田九州男「城下町大坂」(岡本良一ほか編『日本名城集成2大坂城』小学館、一九八五、一六〇―一七一頁、②伊藤毅「近世都市と寺院」(吉田伸之編『日本の近世 第9巻 都市の時代』中央公論社、一九九二、八一―一二八頁などが代表的である。

2) 氏神神社とは、ある土地の守り神(氏神)として地元の氏子の人々に崇敬されている神社であり、氏子の居住する範囲を氏子区域という。氏子以外の人々(崇敬者)に信仰されている神社は崇敬神社と呼ばれる。

3) 西田博「福岡城下町の建設と村落・神社の移転」、『日本歴史』五九三、一九九七、三五―四八頁。ただし、その結論については実証性が希薄なように思われる。

4) ①本多健一「歴史的都市の氏子区域に関する考察―中近世の飛騨高山を事例として―」、『アート・リサーチ』二二―二、二〇二二、一九八―一九一頁。都市における氏子区域の空間構造の分析は、神社に限らず、都市そのものの成立経緯などを考察するための手法として有効と思われる、本稿でも援用する。都市史学における氏子区域研究の意義については、②本多健一「都市における氏子区域の歴史的考察―研究史の検討および中近世世界の事例をふまえて―」、『歴史地理学』三〇四、二〇二二、一八―三五頁参照。

5) ちなみに筆者は、中世後期から近世前期にかけての大坂における都市祭礼の実態を明らかにしたが、それらにおいても祭礼が執り行われる氏神神社の詳しい歴史の解明は残された課題となつていた。①本多健一「戦国・安土桃山期の太坂・堺における都市祭礼―天王寺土塔会を中心に―」、『藝能史研究』三三七、二〇二二、二二―四八頁、②本多健一「江戸前期の大坂における都市祭礼の基礎的考察」、『民衆史研究』一〇四、二〇二三、三二―四九頁。

6) 前掲⑤②。なお、近代における大阪市中の氏子区域地図は前掲⑤②所収第1図を参照。

7) 生國魂・坐摩両社の歴史の詳細については、①式内社研究会編『式内社調査報告 第五巻 京・畿内5』皇學館大學出版部、一九七七、②谷川健一編『日本の神々―神社と聖地 第三巻 摂津・河内・和泉・淡路』白水社、一九八四などを参照。ただし、内容が古代に偏つていたので、中世ないし近世前期の歴史は前掲

5) なども参照。

- 8) 大阪天満宮の歴史の詳細については、大阪天満宮史料室編『大阪天満宮史の研究1・2』電文閣出版、一九九一—一九九三などを参照。

- 9) 以下の由緒は各社のホームページによる。

- 10) 古代八十島祭の研究は数多いが、最近では以下のものがある。①榎村寛之「古代都市難波の祭祀」(榮原永遠男・仁木宏編『難波宮から大坂へ』和泉書院、二〇〇六)、六九—八九頁、②羽床正明「摂津国難波津の祭祀・八十島祭の草創について」古墳時代成立説への批判、『歴史と神戸』五三—三三、二〇一四、一一—二二頁、③林原由美子「皇位継承儀礼としての八十島祭」、『京都女子大学大学院文学研究科研究紀要 史学編』二八、二〇一九、一一—三二頁など。

- 11) 管見の限り、御霊神社と八十島祭を結びつける説は、享保一九年(一七三四)の『摂津志』(大日本地誌大系)が初見である。瀧川政次郎も、八十島祭の祭場は『風俗歌』にうたわれた「難波(なば)のつづら江」(土橋寛・小西甚一校注『日本古典文学大系3古代歌謡集』岩波書店、一九五七、四三八頁)であり、御霊神社の濫觴はそこに祀られた祠(菟布良社)に他ならないとしたが、両者を結びつける根拠が薄弱なように思われる。①瀧川政次郎「八十嶋の祭と御霊神社」(瀧川政次郎『律令と大嘗祭—御代始め諸儀式—』国書刊行会、一九八八)、二九—三三八頁、初出一九八三、②瀧川政次郎「菟布良社考—御霊神社船渡御の由来—」、『史迹と美術』五六—八、一九八八、二二〇—二二二頁。

- 12) 新修大阪府史編纂委員会編『新修大阪府史 第4巻』大阪市、一九九〇、五五八頁。矢内は、その根拠として、これら神社の鎮座地周辺に目立つ街区割の不自然な屈折がかつての村落屋敷地の反映であるためとしているが、本稿第三章で詳しく述べるように、明確にこの根拠があらはまるのは御霊神社に限られるように思われる。

- 13) 『義演准后日記』(史料纂集 慶長五年(一六〇〇)二月一日条など)。

- 14) 『摂津名所図会大成』巻之八、安政二年(一八五五)〜万延元年(一八六〇)(船越政一郎編『浪速叢書 第八 摂津名所図会大成其二』浪速叢書刊行会、一九二八、一七八頁)。ちなみに、やや東側には今宮村の氏神、廣田神社(浪速区日本橋西二丁目)も鎮座している。なお、十日戎で有名な今宮戎神社(浪速区恵美須西一丁目)は、氏子を持たない崇敬神社であった。

- 15) ①『蘆分船』延宝三年(一六七五)(船越政一郎編『浪速叢書第十二 地誌其一』

浪速叢書刊行会、一九二七、八〇頁)、②『大坂濫觴書一件』元禄二年(一六九九)(大阪府参事會編『大阪府史第五』大阪府参事會、一九一一、六頁)、③『名董探杖』巻之五、安永七年(一七七八)(大阪府神社庁編『大阪府神社史料資料上』大阪府神社庁、一九三三、一一八—一九頁など)。

- 16) ①杉本厚典編『大阪上町台地の総合的研究』大阪市博物館協会・大阪文化財研究所、二〇一四、九—二二頁および巻頭図版一—七頁、②豆谷浩之・南秀雄「豊臣時代の大坂城下町」(大阪市立大学豊臣期大坂研究会『秀吉と大坂—城と城下町』和泉書院、二〇一五)、二二—二六頁、③松尾信裕「古代・中世の船場地域の景観」、『大阪歴史博物館研究紀要』一六、二〇一八、一九—三二頁など。なお第1図で示したように、地形図では難波砂堆上に10メートル間隔等高線がひかれなため、同砂堆にあつた微地形の起伏の高低差は10メートル未満であつたと推定される。

- 17) 『日本書紀』(徳天皇三二年正月条。この歌が砂堆をうたつたものであることは、①日下雅義『古代景観の復原』中央公論社、一九九一、二二五頁、②前掲16)①一六頁などで指摘されている。

- 18) 新修大阪府史編纂委員会編『新修大阪府史 第1巻』大阪市、一九八八、七六三—七六四頁(東野治之執筆)。

- 19) 前掲18)七七八—七九一頁(服部昌之執筆)。

- 20) 『群書類従・第二十輯 合戦部』続群書類従完成会、一九五九、六三五頁。『足利季世記』にもほぼ同様の記述がある。

- 21) 『教如上人御消息集』(天正四年(一五七六)五月三日付「天津教信宛書状」(福岡光超・佐々木孝正・早島有毅編『真宗史料集成 第六巻 各派門主消息』同朋舎メディアプラン、二〇〇三、八四九頁)など)。

- 22) 瀧川政次郎「三津八幡宮と石清水八幡宮寺領三津寺庄」、『史迹と美術』三四—四、一九六四、一二—一三〇頁。

- 23) 東京大学史料編纂所編『大日本古文書 家わけ四ノ一 石清水文書之一』東京大学出版会、一九八一、三五七頁。

- 24) 大阪府史編纂所編『御津八幡宮・三津家文書(上)・(下)』—近世初期大坂関係史料—『大阪府史料調査会、一九八六。』

- 25) ①藤井富太郎『み津』みつ誌編集委員会、一九六八、②内田九州男『大坂三郷

- の成立―市街地の形成を中心として―、『大阪の歴史』七、一九八二、三八―六三頁、③伊藤毅「島之内の成立―三津寺村を中心に―」（伊藤毅「近世大坂成立史論」生活史研究所、一九八七、二二七―三〇六頁、④上畑治司「近世初頭の三津寺町」、『大阪の歴史』五三、一九九九、二一―七〇頁など。内田は「三津寺町は、大坂三郷のなかでは、こうした村から町への編成替えの経過の判明する唯一の町」としている『日本史大事典 第六巻』平凡社、一九九四、四五―四頁）。
- 26) 前掲25)③二六五頁。
- 27) 前掲24)所収。
- 28) 『新編・宝暦雜録』宝暦九年（一七五九）条（井口洋・松原秀江・多治比郁夫・大橋正叔編『上方藝文叢刊8 上方巷談集』上方藝文叢刊行会、一九八二、一七―一八頁）など。この宮座を対象とした論考に井上智勝「近世大坂周辺村落の宮座と本所―西成郡西高津村高津神社を中心に―」、『大阪歴史博物館研究紀要』四、二〇〇五、一五―二三頁があるが、高津宮や西高津村の沿革にはふれられていない。
- 29) 中世郡戸村（郡戸庄）の概要は、新修大阪府史編纂委員会編『新修大阪府史 第2巻』大阪市、一九八八、一七九・五二―五二二頁参照（河音能平執筆）参照。
- 30) 和漢三才図会刊行委員会編『和漢三才図会 下』東京美術、一九七〇、一〇一〇頁。
- 31) なお、東高津宮は、もともと現在の近鉄上本町駅付近（現天王寺区上本町六丁目）に鎮座していたが、昭和七年（一九三二）、同駅拡張にともなうて現在地へ移転している。また北高津宮は、明治四〇年（一九〇七）に高津宮（合祀）されている（井上正雄『大阪府全志 卷之二』大阪府全志発行所、一九二二、五七八頁）。
- 32) 清水靖夫編『明治前期・昭和前期 大阪都市地図』柏書房、一九九五、八八―八九・一〇四頁。
- 33) 大阪府西成郡役所編『西成郡史』大阪府西成郡役所、一九一五、二二六―二一八頁および前掲31)四九〇頁。
- 34) 前掲31)四六八・五七九頁。氏子区域の範囲は、黒田一充編『神社を中心とする村落生活調査報告（一）―大阪市・三島郡・豊能郡―』関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター、二〇〇七（調査は一九三五―三七）も参考にした。ただし、他社との境界部分は筆者による推定を含む。
- 35) 東成郡と西成郡との境界は、時代によつて変化はあるものの、『摂津名所図会』巻之四に「谷町の以東を東生郡、以西を西成郡といふ」とあるように、おおむね谷町筋と考えられる（森修編『日本名所風俗図会10 大阪の巻』角川書店、一九八〇、一二四頁）。
- 36) 棚橋利光編『四天王寺古文書 第一巻』清文堂出版、一九九六。
- 37) 内田九州男「豊臣秀吉の大坂建設」（佐久間貴士編『よみがえる中世―本願寺から天下へ大坂』平凡社、一九八九、三四―五五頁など。北平野町とともに、その南側の南平野町も城下町として建設された。
- 38) 大阪府史編纂所編『大阪府史史料第六十九輯 東成郡神社関係史料』大阪府史料調査会、二〇〇七、一二四―一二五頁。餌差町は、形式的には東高津村の一部であるが、なかば独立的な集落であつたと思われる。
- 39) 筆者の聞き取り調査による。ただし、町建設当初から生國魂を氏神としていたかどうかは定かでない。なお、南平野町の氏神は五條宮（現天王寺区真法院町）である。
- 40) 『実隆公記』（大日本史料）大永四年五月二日条など。
- 41) 大澤研二「中世大坂の道」（大澤研二『戦国・織豊期大坂の都市史的研究』思文閣出版、二〇一九、三五―六七頁（初出は二〇〇一））。
- 42) 『地域史研究―尼崎市立地域研究史料館紀要―』八一三、一九七九、六七―九二頁。
- 43) 国際日本文化研究センター『日文研データベース 森幸安データベース』[https://sekiei.nichibun.ac.jp/MORe/detail?group_h=043\(10\)22年7月22日閲覧](https://sekiei.nichibun.ac.jp/MORe/detail?group_h=043(10)22年7月22日閲覧)。
- 44) 前掲25)③および吉田高子・松口輝久「大坂島之内の町割と敷地割構成について―近世大坂城下町の構成と形成過程に関する研究その1―」、『日本建築学会計画系論文報告集』四五四、一九九三、一六五―一七二頁など。
- 45) なお、明治期の西高津村の中で、高津宮の氏子区域がその一部（谷町九丁目（宇梅ヶ辻）に限られている）ことはいささか奇異に思われるが（第2図）、その他の

村域は寺院や生玉社の敷地であり、そもそも氏子となる一般住民が住んでいなかったためであろう。

- 46) 大阪市参事會編『大阪市史第五』大阪市参事會、一九二一、七六―七七頁。

- 47) 前掲33)。

- 48) 前掲16)①。

- 49) なお、郡戸村とその北側の生玉庄との境界は、豊臣期大坂城惣構として利用された、上町台地東側の清水谷と同西側の鰻谷という二つの浸食谷を結んだラインに想定した。鰻谷については、北条氏長編・小幡景憲評『慶元記―大阪夏冬兩陣始末』武蔵吉彰、一八九一、一一七頁参照。

- 50) 竹内若校訂『毛吹草』岩波書店、一九四三、六五頁。

- 51) 西宮市『しのみやデジタルアーカイブ』
https://archives.nishi.or.jp/04_entry.php?key=1736 (二〇二二年四月三日閲覧)。同絵図のうち大坂三郷など淀川以東の地域は、元和八年(一六二二)から正保四年(一六四七)までの間に描かれたとみられる(磯永和貴『西宮市立郷土資料館蔵「慶長十年撰津国絵図」の描写内容と表現様式』、『人文地理』四八―六、一九九六、七〇―八五頁)。

- 52) 前掲15)①七六頁。

- 53) 前掲32)一〇〇頁。

- 54) ①前掲12)、②内田九州男『都市建設と町の開発』(高橋康夫・吉田伸之編『日本都市史入門Ⅱ町』東京大学出版会、一九九〇)、四一―五七頁、③前掲16)③など。

- 55) 前掲29)一六七頁。

- 56) 前掲15)①八二頁。

- 57) 前掲29)一六四・五〇三―五〇五頁。

- 58) 前掲33)二二―二二二頁。ただし、『西成郡史』の下難波村の記述は、もともとこの範囲に島之内全域を含めているなど、にわかに信じがたい内容がある。本稿ではこれらの説明には従っていない。なお、近世の難波村については塚田孝

「都市大坂の拡大と難波村―成舞家文書とは?」(塚田孝編『近世巨大都市の社会構造と史料』大阪市立大学大学院文学研究科都市文化研究センター、二〇一九)、一八―三四頁参照。

- 59) 前掲15)①三一四頁。

- 60) 博労稲荷の確実な史料上の初見は、先述した『慶長十年撰津国絵図』に「稲荷宮」と描画されている部分と思われる(前掲51)。なお、エッゲンベルク城蔵『豊臣期大坂図屏風』の船場に描かれた立派な神社を同社とみる説があるが、現時点では仮説の域を出ていないようである。詳細は関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター編『国際シンポジウム 新発見「豊臣期大坂図屏風」の魅力―オーストリア・グラーツの古城と日本―』関西大学なにわ・大阪文化遺産学研究センター、二〇〇九参照。

- 61) 前掲15)③一五〇頁。

- 62) 前掲32)一〇四頁。

- 63) 前掲54)。

- 64) 前掲30)一〇一五頁。

- 65) 仏書刊行会編『大日本仏教全書 第二二八冊』名著刊行会、一九八一、三四四―三四五頁。

- 66) 前掲1)①。

- 67) 岡田倭志『撰陽群談』元禄一四年(一七〇二)(蘆田伊人編『大日本地誌大系』(三八)撰陽群談)雄山閣、一九七一、八頁など。

- 68) 前掲38)一六頁。

- 69) 『撰津名所図会』再板卷之三(前掲35)四八一―四八二頁)および『撰津名所図会大成』卷之三(船越政一郎編『浪速叢書 第七 撰津名所図会大成其一』浪速叢書刊行会、一九二七、一八九頁)。

- 70) 本多健二『中近世京都の祭礼と空間構造―御霊祭・今宮祭・六斎念仏―』吉川弘文館、二〇二三、八六―一一〇頁など。

- 71) なお、元和三年(一六二七)に大坂へ創祀された川崎東照宮(現北区天満一丁

目)はきわめて政治色の強い神社であつたが、氏神神社とはなっていない。上田
 長生「ある神社の消長―大坂の東照宮―」、『編纂所だより』二七、二〇〇六、
 一一―二頁。

72) 前掲25)②および前掲37)など。

73) 前掲5)②。

第1表 近世大坂市中における氏神神社の一覧

神社(現社名、現住所)	現在の主祭神	17 世紀の主祭神	備 考
生玉社(生國魂神社、天王寺区生玉町)	生島大神・足島大神	(天生玉命)	
座摩社(坐摩神社、中央区久太郎町四丁目渡辺)	生井神・福井神・綱長井神・阿須波神・波比岐神	底筒男命・中筒男命・表筒男命	『延喜式神名帳頭註』では祭神神功皇后
天満天神(大阪天満宮、北区天神橋二丁目)	菅原道真公	(菅原道真)	
津村御霊社(御霊神社、中央区淡路町四丁目)	天照大神荒魂・津布良彦神・津布良媛神・応神天皇・源正霊神	不詳だが、一説に鎌倉権五郎景正	
博労稲荷(難波神社、中央区博労町四丁目)	仁徳天皇	平野大明神(仁徳天皇)・祇園牛頭天皇・稲荷大明神	
三津寺八幡(御津宮、中央区西心斎橋二丁目)	応神天皇・仲哀天皇・比咩大神	応神天皇	
牛頭天王社(難波八阪神社、浪速区元町二丁目)	素盞鳴尊・奇稻田姫命・八柱御子命	牛頭天皇	
高津社(高津宮、中央区高津一丁目)	仁徳天皇	仁徳天皇	祭神下照姫命という説あり
玉造稲荷(玉造稲荷神社、中央区玉造二丁目)	宇迦之御魂大神	上御前・中御前・下御前・田中明神	社名は豊津稲荷ともいった

出典:本多健一 2023 など。現在の主祭神は各神社 HP、17 世紀の主祭神は『蘆分船』『難波鑑』による。括弧内の祭神は名前が明記されていないが、説明文などから推定できるもの。

第2表 中世～近世初頭の大坂周辺における主な村落

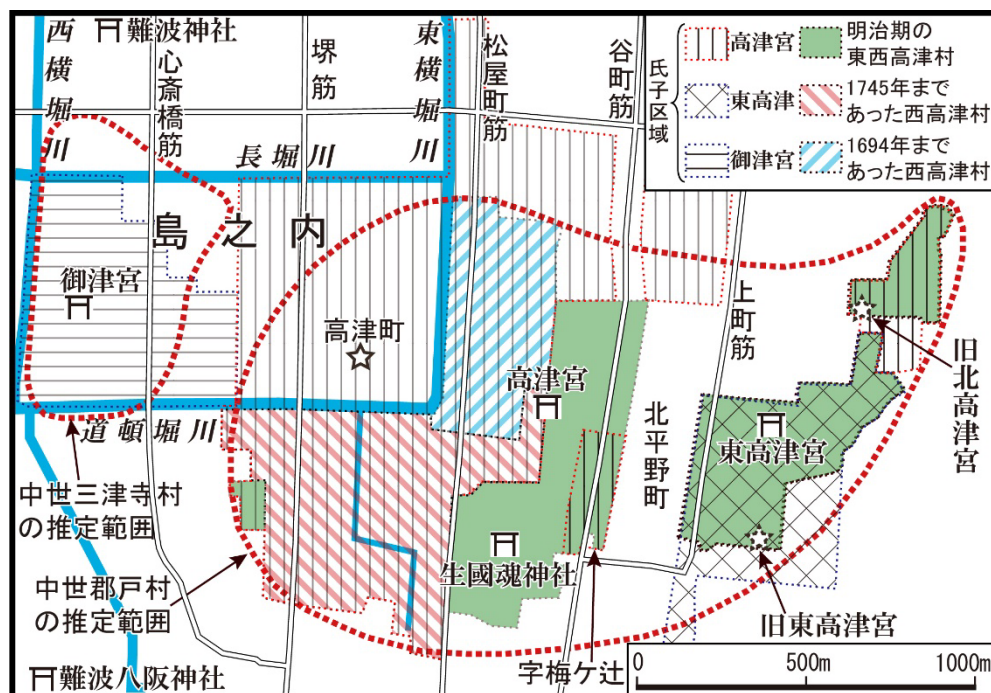
村落(荘園)		史料上の初出年代	初出の典拠史料	『高御改帳』石高
津村(津村郷)		元弘 3 年(1333)	『内蔵寮領等目録』	507 石
上難波	(難波荘)	12 世紀後半	「成勝寺年中相折帳」	420 石
下難波			(『祈雨法御書』紙背文書)	1,538 石
三津寺(三津寺庄)		承久 2 年(1220)	「検校祐清譲状」(『石清水文書』 『田中家文書』)	121 石＋48 石
木津(木津浦)		13 世紀頃	『源平盛衰記』巻 47	1,976 石
今宮(津江御厨)		13 世紀頃	『源平盛衰記』巻 47	1,879 石
郡戸(郡戸荘)		保元 2 年(1157)	「法橋信慶書状」	東 211 石
※後の高津村			(『兵範記』紙背文書)	西 381 石
玉造(玉造御庄)		平安初期	『上宮聖徳太子伝補闕記』	11 石(200 石)
(参考)生玉		嘉元 4 年(1306)	『昭慶門院御領目録』	－

出典:『新修大阪市史 第 2 巻』ほか各種資料より作成。『高御改帳』(『天正十九年撰津一国高御改帳』)石高のうち斗以下は省略(玉造の 200 石は「豊臣秀吉朱印状」による)。一部推定を含む。

第3表 中世郡戸庄および近世東西高津村の関連年表

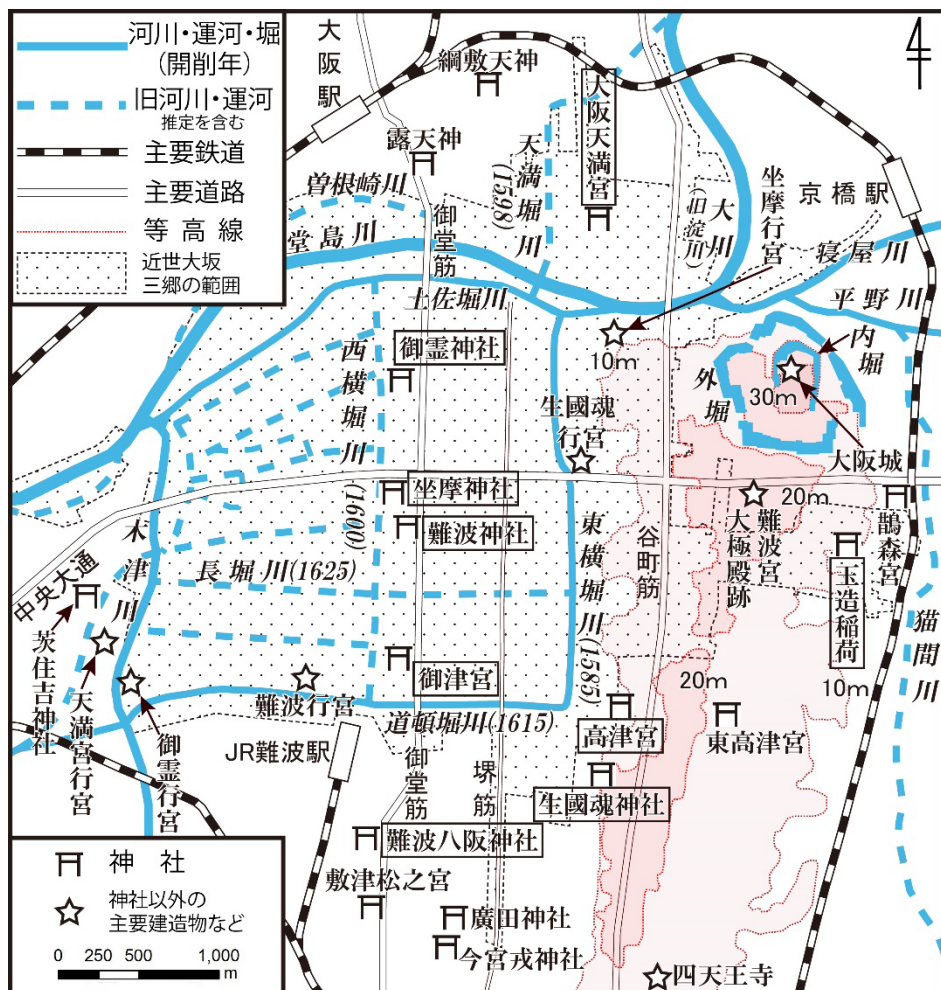
年 代	内 容	典 拠
保元 2 年(1157)	中世郡戸庄の史料上の初見	「法橋信慶書状」『兵範記』
元弘 2 年(1332)	「天王寺へ押し寄せ、古宇津の在家に火を懸け」	『太平記』巻第六
応永 31 年(1424)～ 文明 8 年(1476)	「西成郡郡戸庄」「東郡戸」とあり、郡戸庄は西成郡と東成郡とにまたがっていたと推定	『天王寺金堂舍利講記録』
大永 4 年(1524)	三条西実隆が四天王寺から「コウツ」を経て渡辺で乗船	『実隆公記』『住よし紀行』
天文 4 年(1535)	「敵天王寺へマワリ候テ、コウツ・渡辺・ツ村等焼テ」	『私心記』
元龜元年(1570)	織田信長軍が郡戸村などに布陣	『細川両家記』
天正 11 年(1583)頃	豊臣期大坂城城下町として南北平野町を建設、この際に郡戸村が東西に分断か	『兼見卿記』・内田九州男 1989 など
元和元年(1615)	御用瓦師・寺島総左衛門休清が、後の南瓦屋町 46,000 坪を拝領	『寺嶋家旧記』『先祖覚』
元和 3 年(1617)頃	東郡戸村石高 211 石 7 斗、西郡戸村 381 石 6 斗 2 升 3 合、三津寺村 169 石 4 斗 4 升	『天正十九年摂津一国高御改帳』
元和 6 年(1620)頃	三津寺村が大坂三郷へ編入され、島之内西部が市街地化、元和年間中には東部も市街地化	『御津宮文書』『三津寺島やしきに成申候帳』・伊藤毅 1987 など
寛永 2 年(1625)	「郡戸」の表記を「高津」へ改める	『西成郡史』
慶安 2 年(1649)頃	高津五右衛門町が西高津村から大坂三郷へ編入	『西成郡史』
元禄 7 年(1694)	南瓦屋町が西高津村から大坂三郷へ編入	『大阪府全志 第二巻』
元禄 8 年(1695)	西高津町が西高津村から大坂三郷へ編入	『西成郡史』
元禄 15 年(1702)	元伏見坂町が西高津村から大坂三郷へ編入	『西成郡史』
延享 2 年(1745)	高津新地が西高津村から大坂三郷へ編入	『西成郡史』
明治 30 年(1897)	西高津村・東平野町(明治 22 まで東高津村)が大阪市へ編入	『大阪府全志 第二巻』
明治 40 年(1907)	東区餌差町の北高津宮を高津宮へ合祀	『大阪府全志 第二巻』

出典：各種典拠史料などから作成。本稿と関連のある内容に限定した。



第2図 東西高津村・三津寺村関係図

出典：『仮製地形図』1885 を基図として、本文および第3表などで提示した各種資料より筆者作製。



第1図 現代大阪の主要神社分布図

出典: 1/25,000 地形図を基図として各種資料より筆者作製。近世大坂三郷の範囲や旧河川・運河の流路は『新修大阪市史 第10巻』付録歴史地図「図5 天保期の大坂三郷」による。社名を四角枠で囲った神社が近世大坂市中(大坂三郷)の氏神神社。



第3図 津村・上難波村と思われる町割・街区割
出典: 松尾信裕 2018 所収図を加工して転載。